

2010 年度訪問講座「日本とアジア」報告書

東北大学東北アジア研究センター国際交流委員会

文責：徳田由佳子・岡洋樹・高倉浩樹

1. 概要

(1) 実施期間 2010 年 10 月 5 日から 10 月 9 日 (5 日間)

(2) 用務 訪問講座「日本とアジア」の実施および現地研究者との学术交流

(3) 訪問期間 ノボシビルスク国立大学 (ロシア)、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所および同研究所附属博物館 (ロシア)

(4) 用務地 ノボシビルスク市 (ロシア)

(5) 参加者 岡洋樹 (東北大東北アジア研教授)、高倉浩樹 (東北大東北アジア研准教授)、徳田由佳子 (東北大東北アジア研助手)、阿子島香 (東北大文学部教授)

(6) その他 準備および別用務のため、徳田は現地で合流

(7) まとめ 本年度の訪問講座も成功に終わった。ノボシビルスク大学の日本語および日本への関心の高さを再確認すると共に、学生たちに新たな視座を与えることもできた。また、今回は学生との交流にとどまらず、短時間ではあったが研究者間の交流も行うことが出来た。本訪問によって東北大学の考古学研究チームとロシア科学アカデミーシベリア支部歴史学研究所との繋がりが強化されたことは疑いない。今後の共同研究促進に貢献することになったことも今回の大きな成果と言えるだろう。



写真

(左) ノボシビルスク大学の前で  
東洋学科クワリエツ氏と

(右) ノボシビルスク市内のアカデム  
クニガで書籍購入



## 2. 実施状況（出張日程）

日付	行動	宿泊地
10月5日 (火)	仙台より北京へ (CA 924)	北京
10月6日 (水)	(1) 北京よりノボシビルスクへ移動 (S7 864) 徳田は空港出迎えて合流 (2) ノボシビルスク市内観光 (ロシア学術文献収集) (3) ノボシビルスク大学関係者 (学生含む) との交流会	ノボシビルスク (アカデムゴロドク)
10月7日 (木)	(1) ノボシビルスク大学人文学部関係者との懇談 (パーニン学部長、ブロードニコフ副学部長) (2) 訪問講座「日本とアジア」実施 (3) ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所訪問 (4) ノボシビルスク大学関係者との交流会	ノボシビルスク (アカデムゴロドク)
10月8日 (金)	(1) 学生研究発表会 (東洋学科) (2) 学生研究発表会 (考古学) (3) ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所附属博物館訪問 (4) 午後9時アカデムゴロドクから空港へ移動	機内泊
10月9日 (土)	(1) 零時35分ノボシビルスクから北京へ移動 (S7 873) (2) 北京発 (09:25) 成田着 (CA 925) 現地解散	

## 3. 今年度の訪問講座実施経緯と準備作業

### ・ 講座の目的と昨年度実施状況

訪問講座「日本とアジア」は、東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部の共同ラボラトリー事業の一つで、実施主体は東北アジア研究センター国際交流委員会である。その目的は、ロシアで日本語を学ぶ学生・院生に対して、日本および隣接するアジア地域の歴史や文化・社会について、日本の最新の研究成果を生々の日本語で伝えることである。学生への講義という形態での交流を通して、関連する研究分野における日本とロシアの学術研究交流を促進することを目指している。2008年度から2012年度の5年間実施する予定である。

昨年度は、講義という形で実施された第一回目であり、日本語教育を行っているノボシビルスク市内の教育、公共機関からも多くの参加者があったため会場の収容人数を遙かに超える人数が集まり、講演開始が遅れるという嬉しいハプニングがあった。そのため、本年度は会場の手配から資料の準備まで、昨年度の反省点を踏まえつつ臨んだ第二回目の訪問講座であった。



## 写真

(左) 開会の挨拶をする岡氏

(右) 講義前の高倉氏とフクロワ氏

### ・ 共通テーマの設定と旅行準備

訪問講座は毎回大まかなテーマを設け、関連する研究者を選定するが、今回設定したのは「北方の視座のなかの日本」である。今回の担当者は阿子島香（文学研究科）と高倉浩樹（東北アジア研究センター）で、前者は「日本文化のあけぼの：旧石器時代から縄文時代へ」、後者は「日本の先住民族問題：アイヌ民族の歴史と現在を中心に」と題して授業を行うこととなった。

日程調整に関しては、本年は当初から、昨年ロシア側からの熱いリクエストを受けながらスケジュールの都合で参加を見送らざるをえなかった阿子島教授（文学研究科）に講演していただくことが決まっていたため、まずは阿子島教授との日程調整が行われた。2010年3月には日本側で幾つかのパターンを提案し、4月にはロシア側との調整を行い大凡の日程を確定させた。最終的に日程を確定させたのは航空チケット予約の都合もあり6月上旬となった。また、日程の確認が済むと直ちに招聘状の手配を開始し7月2日にはノボシビルスク大学へ必要書類の引渡しを完了した。送迎車の手配、宿の予約依頼についても同時に行った。（ロシア側から招聘状交付の連絡を受けたのは8月20日）。国際交流委員会へ実施計画書を提出したのもこの頃だった。9月に行われた東北アジア研究センター全体会議で、2010年度訪問講座実施計画が報告された。

8月下旬には派遣講師に詳細なレジメの作成を依頼した。前年もそうであったが、これは学生の事前勉強のために不可欠というロシア側の要望である。レジメやパワーポイントには、ふりがなを振ることで理解しやすい資料づくりを心がけた。日本側の締切りは講義の2週間前である9月22日とし、期日通りにロシア側に送付された。滞在プログラム（案）をロシア側に流したのも8月下旬だった。これを受けロシア側からは、今回の講義のうち1つは考古学をテーマとしているため日本語を知らない学生（人文学部考古学学科）、さらに考古学研究所からも研究者を招待する提案がなされ、通訳をつけることが伝えられた。後日、通訳者が事前に準備できるように講義原稿を要請されたが、それについては前年同様、講師に過大な負担となることを説明し、講義原稿の事前提出は不可能である旨伝えた。ただし、授業の当日に発表内容に関する打合せの時間を設けることで、講師・通訳者間の共通認識の確立を図った。

一連の滞在プログラム、ノボシビルスクでの宿の手配、空港での送迎、その他の最終的

な調整は、東洋学科の教員と予め現地入りしていた徳田で行った。数日早めに現地入りした理由の一つには、これまで絶えずロシア側の受け入れ担当責任者として連携していた副学科長が、訪問講座の期間中ノボシビルスク不在になることが 8 月下旬に明らかになり、副学科長のノボシビルスク滞在中に他の教員たちとも打合せ、確認を行う必要があると考えられたためである。打合せは 3 回行われ、第 1 回目はレジメの確認、プログラムの確認、会場の確定、博物館などへのアポイントの確定、配車の確認、第 2 回目には再びレジメの確認、昼食等会場の確認、最終回には配付資料の搬入、プログラムの最終決定、学部長との懇談会進行手順の確認、空港への出発時間の確認などを行った。なお、ホテルの予約については直接ホテルに行った。

なお、この講座は国際交流委員会の予算で実施されるため本年度の予算要求に必要な経費を計上し提出済みである。



写真（左）講義をする阿子島氏

（右、中）集まった聴講者たち



#### 4. 訪問講座の実施および学生研究発表会について

訪問講座第一日目は、(1) 岡氏による趣旨説明、(2) 阿子島氏講義「日本文化のあけぼの：旧石器時代から縄文時代へ」、(3) 高倉氏講義「日本の先住民族問題：アイヌ民族の歴史と現在を中心に」という構成で行われた。昨年は二日目の午前中にも講義を行ったが、短期間滞在という時間的制約、学生の集中力の点を考慮し、本年度は初日に 2 講義、二日目は午前中から学生発表というプログラムに変更した。

その内容の詳細は資料 6-2 を参考にしてほしい。先にも述べたが、今回は日本語を学んでいる学生の他、考古学研究所や文学部考古学学部の参加もあったため、授業と逐語通訳込みで 1 講義 2 時間という時間配分で行われた。当初は質疑応答も含めて 2 時間と言うことで計画したが、いずれも講義のみで制限時間となり、質問に関しては翌日の研究発表会に持ち越されることとなった。もう 1 つ昨年と異なる点は、会場の都合で予め受講者は 50 名以内に設定され、他大学からの受講者が殆どいなかったことである。昨年は第一回目と言うこともあり、初日の午前は 100 名を超える受講者で、立ち見が出るほどだったが、本

年の外部参加者は国立工科大学からの 1 名のみだった。「学生の集中力は 45 分まで」と事前に聞かされていたが、学生の熱心さは昨年同様で、2 時間の講義もメモを取ったり頷く様子を見せるなど、皆最後まで真剣に、のめり込むように聞いていたのが印象的であった。

二日目の午前中はノボシビルスク大学人文学部東洋学科日本語コースの学生による研究発表会が行われた。プログラム作成時、昨年の発表は 21 人で多すぎたとの見解から、本年の発表は 5 年生の 9 名のみで 4 年生は聴講者として同席するという事になった。しかし、当日は種々の理由から欠席者が 4 名出たため、5 年生 5 名、4 年生の代表 1 名、合計 6 名の発表となった。各自 5 分程度、卒業論文に関するテーマで発表を行い、それに対して日本側の教員が質問・コメントをするという昨年同様の形式がとられた。今回は、香道、谷崎潤一郎作品にみる男性主人公、単文構文と意味論理、村上春樹作品中の“気”、壮士、和紙、についての発表であったが、アンケートの自由記述からも見られるように、現代の日本に高い関心を持つ学生も多く、今回の研究発表においても文学作品などを通して日本人の特徴や気質を導こうとするテーマが目立った。発表にはなかったが、日露関係や日韓関係に対して興味を持っている学生も見受けられるため、講座「日本とアジア」は正に学生たちが望むテーマにリンクした設定だったと言える。

もう一点。学生発表ではノボシビルスク大学側で司会者を予め決定していなかった。このため、進行があやふやになりそうだったところ 5 年生の学生が司会を買って出てくれた。タイムキープがうまく出来なかったために発表者数は当初予定よりも少なかったにもかかわらず、予定時間を大幅にオーバーしてしまった。結果的に考古学学科の学生たちを十数分待たせることになってしまったが、東洋学科の学生の熱意と積極性には感服する。

その後、人文学部考古学学科の専任教師の L. V. LBOVA 教授の司会で、学生による研究発表が行われた。考古学学科は、北方、中央アジア、中国、韓国、日本を含む東南アジア地域の考古学、同様にシベリア地域の民族誌学分野に関し、より専門的な教育を行う目的で 1992 年、歴史学科から派生し、2004 年には授業料有料・無料どちらの学生も入学可能な独立した学科として人文学部内に開設された（ノボシビルスク大学文学部ホームページより <http://gf.nsu.ru/kaf/kaie.shtml>）。



#### 写真

(左) 考古学学科専任教師 L. V. LBOVA 氏

(右) ロシア民謡を披露する学生

発表を行った学生は全部で 10 名。そのうち 1 名は流暢な日本語による発表、残りは英語による発表であった。シベリアの旧石器時代の研究やアルタイ地方の民族学分野に関連する研究発表が行われた。東北大の教員との活発な質疑応答が行われた。

## 5. 分析と総括

### ・何を達成したのか？

第二回目の訪問講座「日本とアジア：北方の視座のなかの日本」も成功に終わった。

「北方の視座のなかの日本」というテーマで、日本人の視点から行う講義は、ロシアの視点でロシア人教師から教えられる情報でしか教育されてこなかった学生たちにとって、新たな見地を与えたと言う意味で大きな意味があったと言える。昨年、研究発表を行った5年生7名は全員が日本語関係の進路に進み、これは2000年に開設された東洋学科の開設以来初の快挙であるという。これが直接訪問講座の成果であるとは言い難いが、これまで得られなかった日本についての知識・研究方法を彼らに提供した本講座は、この結果に多少なりとも貢献したのではないかと思われる。

また今回は講義、学生たちの研究発表の合間を縫ってロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所のモロディン副所長を表敬訪問し、同研究所附属博物館の見学も行った。モロディン副所長はこれまで数回東北大学を訪れており、かねてから阿子島研究室との共同プロジェクトの立ち上げを熱望していた。最近になり阿子島研究室と同研究所の研究者交流が開始されたが、今回の阿子島教授のノボシビルスク訪問により両者の親睦は更に深まったと言えるだろう。

本講座準備のために今回は共同ラボラトリーの設備を利用した。3度の打合せはノボシビルスク大学でおこなったが、その他の作業（レジメの印刷、アンケートの作成、滞在スケジュールの作成など）はすべて共同ラボラトリーで行った。短期間の出張では、受入先の設備を少々使わせてもらう程度で事足りるのでよいが、長期の出張や現地でイベントの準備を行う場合、事務所の存在は仕事の効率に関わってくる。今回、自由にコピー機やプリンター、通信機器を利用することができ、現地にオフィスを持つことのメリットを痛感した。

なお、今回の滞在では同ラボラトリー事業の一つである学術文献収集活動も行った。定期刊行物の収集作業（日本への発送作業）やロシア科学アカデミーシベリア支部の研究所出版物については9月下旬から徐々に進めたが、書店での学術文献の購入は訪問団の到着を待って10月6日に実施した。本年も昨年同様、実質的な滞在は3日間という短期間だったにもかかわらず充実した訪問であった。



写真

(左) 真剣な学生たち

(右) 教鞭を執る高倉氏

・授業は理解できたのか？

今回は考古学学部の学生、研究者を招待すること、学生の考古学に関する理解が十分ではない可能性があることを懸念して双方の講師に通訳を付けることになった。しかし、東洋学科の学生に関しては通訳のなかった部分についてもおおむね理解していた様子がアンケートから窺える(資料 6-3 参考)。考古学の専門用語が難しかったという意見もあったが、これについては予めレジメとして用語解説の資料が配付されていたため、かなり参考になったのではなかろうか(資料 6-3 参考)。このアンケートに回答したのは 21 名であるが、そのうちノボシビルスク国立大学学生は 20 名、ノボシビルスク国立工科大学 1 名であった。学生の日本語学習暦は、1~2 年未満、3~4 年未満、4~5 年未満が 19%で、2~3 年未満、5 年以上が 14%と大差なかった。わずか 1 ヶ月という学生も 10%あった。彼らに自分の日本語レベルを評価させると、上級は 5%、中級は 10%、初級 6%であった。2 年以上の受講者のほぼすべては自分のレベルを中級以上とみなしている。内容については学生のすべてが「興味深かった」と回答した。また理解できたかの質問については 76%が「よくわかった(33%)」「どちらかといえばわかった(43%)」と肯定的な意見を表明している。クロス集計をしてみると、上級者は 100%・中級は 90%・初級は 33%が理解についての肯定的意見を出している。このことから、初級の学生にとってはやや難しいがそれ以外についてはおおむね問題なく理解したと考えることができる。

しかし、今回は通訳によるロシア語によって理解した学生もいる可能性が高く、前回集計したアンケートと比較することは難しい。ただし、研究発表を行った 5 年生 5 名と 4 年生代表の 1 名に関しては発表内容もさることながら、日本人講師による質問、コメントに対する反応も非常に良く、自分の考えを日本語でまとめることが十分に出来るレベルであることは疑いない。



(左) 東洋学科学生発表 (中) 司会の 5 年生学生

(右) 考古学学科の学生発表

## ・今後の課題

昨年の取り決め通り、本年は10月の開催となった。旅程期間も昨年同様、北京―ノボシビルスクで3泊5日であったが、1日目に講義(2つ)、2日目に学生の研究発表会というようにスケジュールに余裕を持たせることにより、昨年度ほど恐慌スケジュールではなかった。そのため研究所訪問や博物館見学など、研究所間の交流にも時間を割くことが出来た。しかし、研究所研究者たちと専門的な交流会を企画しようとする場合には旅程を再検討する必要があるだろう。

もう1点挙げるとするならば開催曜日についてである。ノボシビルスク大学では絶えず教室不足に悩まされている。平日の開催であれば広い教室(講堂)を確保することは不可能なため、狭い教室や会議室を利用することになる。この場合は折角のチャンスにも聴講者数を制限せざるを得ない。また、ノボシビルスク市内の大学などで学ぶ学生、教師たちもそれぞれ授業があるためにノボシビルスク大学まで来て講座に参加することができない。土曜日や日曜日開催ということも念頭に置いて来年の日程調整を行うことも検討してもよいかも知れない。

昨年に続き、今回の授業にはパワーポイントの映像とレジメを用意した。漢字にふりがなを振るなどの手間を加えたが、これはノボシビルスク大学の学生たちからの要望であった。授業の理解をより深いものにするためには聴く側の意見は大切である。昨年の授業の感想をまとめてこちらに伝えてくれた山口紀子氏(国際交流基金派遣ノボシビルスク国立大学・日本語教育専門家)の配慮に感謝したい。さらに今回はエレナ・ボイティシエク副学科長不在の中、東洋学科講師陣としてのまとまりを見せ、訪問講座を成功に導いたナタリア・クタフィエワ先生、エヴゲーニャ・フロロワ先生、エレナ・シモノワ先生、そしてこの講座を容認し支援して下さるパーニン人文学科長、多忙の中、連日お付き合いいただいたブロードニコフ副学長に対し深く感謝と敬意を表したい。



写真

(左) 東洋学科の教師たちとの懇親会

(右) 帰路 北京空港



## 6. 資料

- ・ 6-1 : プログラム (6-1a 訪問講座実施計画)
- ・ 6-3 : アンケート (6-3a アンケート見本、6-3b アンケート集計)

2010/6/30

2010 年度訪問講座「日本とアジア」

テーマ： 北方の視座のなかの日本

授業1 日本文化のあけぼの：旧石器時代から縄文時代へ 阿子島香（東北大学教授）

授業2 日本の先住民族問題：アイヌ民族の歴史と現在を中心に 高倉浩樹（東北大学准教授）

日時

2010年10月5日(火)から10月10日(日)

(ただし飛行機旅程まだ確定していないので、日程の微調整の可能性あり)

目的先

ノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科（ロシア連邦ノボシビルスク市）

連絡先

高倉浩樹(東北大学東北アジア研究センター准教授) [hrk@m.tains.tohoku.ac.jp](mailto:hrk@m.tains.tohoku.ac.jp)

塩谷昌史（東北大学東北アジア研究センター助教） [shotani@cneas.tohoku.ac.jp](mailto:shotani@cneas.tohoku.ac.jp)

授業概要

授業（1）日本文化のあけぼの：旧石器時代から縄文時代へ

氷河時代最盛期の後期旧石器時代には、シベリアを含む東アジアの広範な地域に共通性のある石器文化が広がっていた。地球温暖化が進行した後に各地域の独自性が顕著になってくるが、日本列島では縄文土器が特徴的な、日本独自の縄文文化になった。日本人・日本文化の起源地や系統を探るのではなく、列島の地域色がはっきりしてくるということの意味を、アジア的な視点から考える。多くのスライドで東北地方の遺跡・遺物・発掘調査の様子を紹介しながら考える。

授業（2）日本の先住民族問題：アイヌ民族の歴史と現在を中心に

多文化主義・多民族国家日本という視点から、アイヌ民族の歴史と現在について概説する。日本国＝日本人＝日本文化と考えられがちだが、日本国には歴史的に様々な民族的少数者が暮らしてきた。近現代史を踏まえながら、日本国のマイノリティ問題全般について概観する。さらにアイヌ民族の歴史をシベリアを含む北方世界に位置づけると共に、先住民族としての今日的諸相を紹介する。最後に、先住民問題は日本社会にとってどのような意味をもっているのか考える。

\*この他、学生研究発表会および研究交流セミナーを開催する予定

派遣予定者：岡洋樹（副センター長）、高倉浩樹（コーディネーター）、塩谷昌史（研究交流セミナー担当）、阿子島香（文学研究科）の4人

АНКЕТ: Лекция по теме «Япония и Азия», Университет Тохоку-НГУ

1. あなたはどこの大学の何学部から来ましたか？

Укажите Ваш факультет и Университет (место Вашей учебы или работы)

2. あなたは日本語を学んでいますか？もし学んでいるなら何年ですか。

Изучаете ли Вы японский язык? Если да, то сколько лет уже изучаете?

(1) はい Да ( ) 年 (2) いいえ Нет

3. あなたの日本語のレベルを教えてください。以下から一つ選んでください。

Ваш уровень знания японского языка. Выберите один из нижеуказанных вариантов.

(1) 上級 высший (2) 中級 средний (3) 初級 начальный

4. 今回の授業を理解しましたか？ Вы поняли содержание лекции?

(1) よくわかった хорошо понял (2) どちらかといえばわかった более или менее понял  
(3) あまりわからなかった не все понял

5. 今回の授業に興味を感じましたか？ Вы заинтересовались лекциями？

(1) おもしろかった Да (2) おもしろくなかった Нет

6. 日本のどういう点に関心がありますか？

Какой областью японоведения Вы интересуетесь? (желательно на японском языке)

7. 今回の授業の感想を書いてください。

Напишите, пожалуйста, Ваше мнение об этих лекциях (желательно на японском языке)

8. 今後どのような授業内容を希望しますか？

На какие темы Вы хотели бы послушать следующие лекции?

